平成20年度　英語教育改革実践の軌跡

富岡龍明（外国語教育推進部長）

20年度は19年度に策定した英語教育改革の実施初年度に当たり、全学教職員の協力を得ながら実施方に専念した。ここに、その実施状況並びに結果等について述べる。

20年度英語改編の主要項目

20年度の英語改編は、以下の４項目が主要なものである（その他の改編項目については後述）：

１．必修コア英語の少人数化
２．全学規模での習熟度別クラス編成
３．全学規模でのアチーブメントテスト実施
４．新たな成績評価システムの構築

これらの項目は、より高い授業・学習効率の実現と学習成果が確認できるシステム作り、平準性の高い評価システムの構築等を目的としている。以下に上記４項目についてそれぞれの実施状況を述べる。

１．必修コア英語の少人数化

必修コア英語は、これまで一クラス平均60－70名程度の多人数クラスであったが、20年度からはコアC（作文：前期開講）とコアO（オーラル：後期開講）は一クラス30人程度の少人数クラスとして編成した。ただし、マンパワーの関係上、30人クラスとしたのは上級と中級のクラスであり、初級クラスはクラス数自体は少ないが従来どおりの60人以上の多人数クラスのままであり、21年度以降に向けての改善点の一つとして課題として残った。

２．必修コア英語の習熟度別クラス編成

20年４月当初に､新入生のセンター試験（英語）の結果をプレイスメントテストとして活用し、コア英語の前期開講分であるコアCとコアUクラスを上級、中級、初級の３つのレベルで編成した。ただし、このレベル分けは全学部横断的に実施したわけではなく、大枠としてはこれまでの学部別時間割に添った形で、基本的には学部ごとのレベル分けとなっている。

３．アチーブメントテストとしてのG-TELP（国際英検）実施

３－１　20年度前期の概況－G-TELP平均点その他

20年度前期第12週目にあたる７月２日からの１週間を使い、コアC、インテンシブ英語、英語特別演習の各担当教員に実施方をお願いして、計71クラス2007名を対象としてG-TELP（国際英検）のレベル３＜英検準２級―２級、TOEIC400－600レベル」＞を実施した。実施にあたっては、当該授業日に何らかの理由で受験できない学生への対策として土曜日を２回予備日にあて、教育センター英語教員を実施担当者として試験を実施した。

資料１　20年度前期　G-TELPレベル３の結果について

時間割の帯別　G-TELP 平均点一覧（20 年 7 月）

	GRM	LST	RDG	TTL
全国	62.8	42.4	56.3	161.5
鹿児島大学受験者全体	61.2	41.6	57.0	159.8
医学部医学科	80.6	50.3	79.8	210.7
医学部保・療	62.3	40.3	55.6	158.2
歯学部	79.8	48.8	76.4	205.1
農学部	61.9	41.9	58.3	162.1
水産学部	54.4	38.3	48.8	141.5
理学部	58.3	40.3	53.1	151.7
工学部機械	54.1	40.1	50.1	144.4
工学部電・情	55.1	39.0	51.3	145.4
工学部その他	56.5	39.9	52.3	148.8
教育学部	58.1	40.6	53.1	151.7
法文学部経・人	64.8	42.8	61.6	169.1
法文学部法政策	68.5	44.7	66.7	179.9

資料１の解説：略語の意味は、それぞれGRM=文法、LST=聴解、RDG=読解、TTL=合計、を表している。平均点は全国レベルとほぼ同じで、リスニングが弱い傾向がみてとれる。全学平均点

資料２　G-TELPとTOEICの対応について

	グラマー	リスニング	リーディング	トータル
受験者全体	61.2/100	41.6/100	57.0 /100	*159.8 /300

*この得点はTOEICでは400 ～ 450点のレベル

G-TELP（レベル３）とTOEIC得点との対応

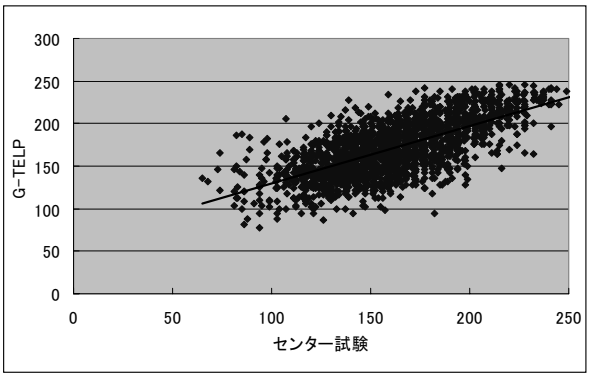
G-TELP得点	100点	150点	200点	250点	300点
TOEIC得点	400点未満	400点前後	450点前後	500点前後	600点前後

は300点満点の159.8で、これは全国平均161.5とほぼ同じレベルの得点である。参考までに付言すれば、以下の資料２に示したように、この159.8という平均点はTOEICでは400 ～ 450点レベルに相当すると考えることができる

資料２の解説：　G-TELPレベル３は、TOEICでは400点～ 600点を網羅していると想定。鹿児島大学のG-TELP平均点（トータル）は159.8点となっておりTOEICでは400点～ 450点あたりに位置されると想定される。（※以上はあくまでも目安とする。）20年前期の本学の得点結果の特徴としては、全国的傾向と同じく、本学学生の場合も文法、読解にくらべてリスニングの得点が低いという一般的傾向を指摘することができる。

資料３　センター試験とG-TELPとの相関

	G-TELP トータル	センター試験 トータル
G-TELP トータル	1	
センター試験 トータル	0.683194501	1



資料３の解説：　上記グラフのG-TELP（レベル３）は英検準２級～２級、TOEIC400 ～ 600程度のレベル。センター試験は１年生が20年１月に受験した分。相関係数が0.683というところからして、G-TELPとセンター試験の相関はかなりあるといえる。

20年１月に学生が受験したセンター試験結果と20年度前期のG-TELP結果の相関を調べたところ、資料３にあるように、0.683という比較的高い相関係数が得られた。本学で今回実施したような、センター試験と資格試験のひとつであるG-TELPとの相関調査は全国レベルでの先行事例となりうると考えられる（ただ、総合点だけでなく文法、読解、リスニング等の個別部門での両試験の相関調査までは技術的に困難であろうと思われる）。この数値結果から推測できるのは、日本で作られた日本人英語学習者向けのセンター試験とアメリカで作成された非英語話者向けの英語力判定試験であるG-TELPとの相関は一般的にかなり高いのではないかということである。

３－２　20年度前期・後期の比較による考察

前期に引き続き、後期は20年12月の第３週にG-TELPを実施した。受験者は1832名であった。ここでは20年度前期と後期のG-TELP得点状況比較その他で、20年度のG-TELP実施を総括してみることとする。

資料４　20年度前期・後期のG-TELP平均点比較

	前　期				後　期				得点差（後期 - 前期）			
	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL
医学部	68.8	43.8	64.2	176.8	78.2	52.7	64.2	195.1	9.4	8.9	0.0	18.2
水産学部	54.8	38.1	49.2	142.2	65.0	45.1	49.9	160.0	10.1	6.9	0.7	17.8
歯学部	75.2	47.6	76.3	199.0	89.4	54.6	71.9	215.9	14.2	7.1	-4.4	16.9
農学部	61.7	41.5	57.7	160.8	69.7	50.2	56.5	176.4	8.0	8.7	-1.2	15.5
教育学部	57.8	40.3	52.9	151.0	66.1	46.7	52.5	165.4	8.3	6.4	-0.4	14.3
法文学部	65.9	42.7	62.9	171.5	72.9	50.5	61.5	184.9	7.0	7.8	-1.4	13.4
全学	60.3	41.0	56.0	157.4	67.9	47.9	54.9	170.7	7.5	6.9	-1.1	13.3
理学部	58.1	40.4	52.8	151.3	63.8	45.8	51.7	161.2	5.7	5.4	-1.1	9.9
工学部	55.8	39.8	51.4	147.0	62.1	45.2	49.2	156.6	6.3	5.4	-2.2	9.5
全国	59.9	41.0	52.6	153.4	64.9	46.3	50.7	161.9	5.0	5.3	-1.9	8.5

資料４の解説：（ここに表示した20年度前期の数値と３－１で用いた20年度前期の数値が異なるのは、前期（2007名受験）と後期（1832名受験）の両方を受験した学生についての比較を行ったためである。）ここでは後期から前期を見た場合に得点の伸びの大きな学部順に並べている。

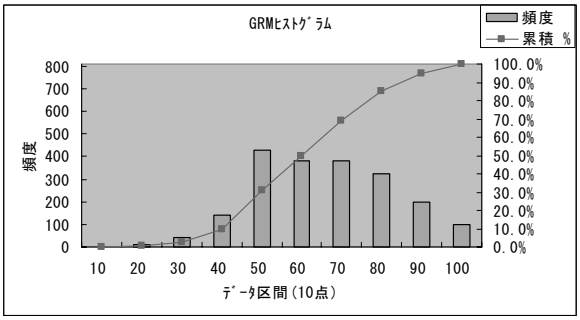
全学で見た場合、合計点では前期の157.４から後期は170.７で13.３ポイントの伸びが見られる。全国平均と比べても、全国が８.５ポイントの伸びであるから全国平均と比べて本学の平均点は56％高い伸びが前期から後期にかけてあったことになる。

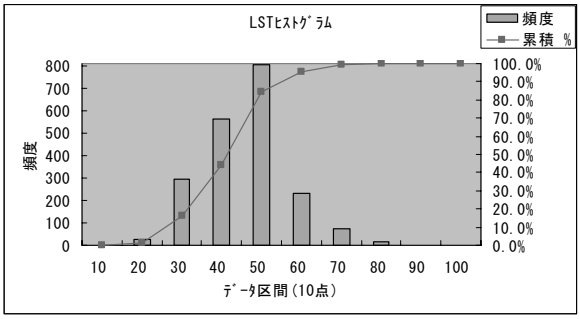
資料５　20年度前期・後期G-TELPの基礎統計と得点分布ヒストグラム

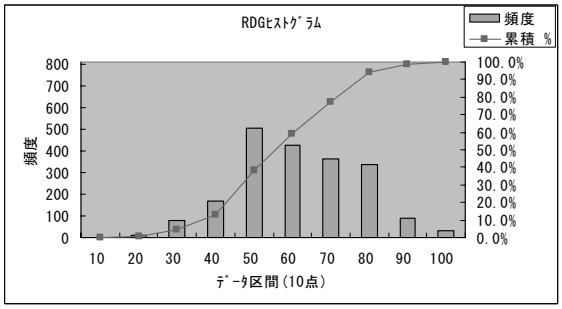
20年度前期の基礎統計

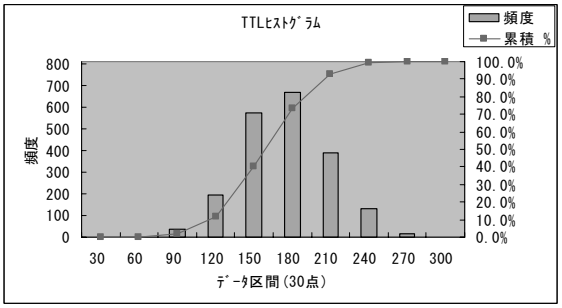
統計項目	GRM	LST	RDG	TTL（G+L+R）
標本数	2007	2007	2007	2007
平均	61.2	41.6	57.0	159.8
標準偏差（ n ）	16.782	10.552	15.303	33.071
標準偏差（n － 1）	16.786	10.555	15.307	33.079
分散（ n ）	281.636	111.343	234.173	1093.684
分散（n － 1）	281.776	111.399	234.290	1094.230
最小値	9	12	0	61
中央値	64	42	58	159
最大値	100	88	100	288
範囲	91	76	100	227
第１四分位数	50	33	46	137
第３四分位数	73	50	67	181
歪度	-0.100	0.153	0.014	0.139
尖度	-0.563	0.143	-0.208	-0.089
変動係数	0.274	0.254	0.269	0.207

20 年度前期各セクションとトータルのヒストグラム





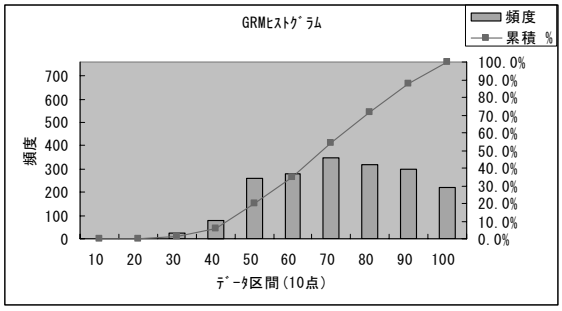


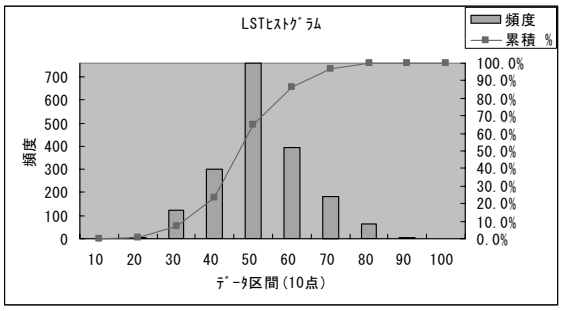


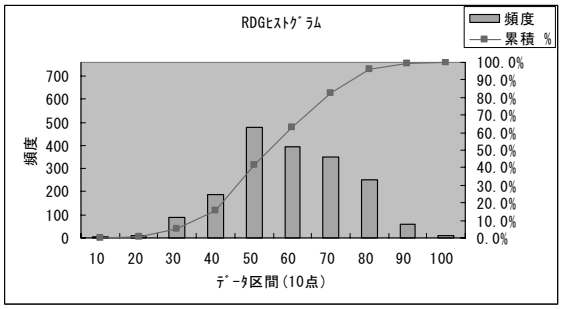
20年度後期の基礎統計

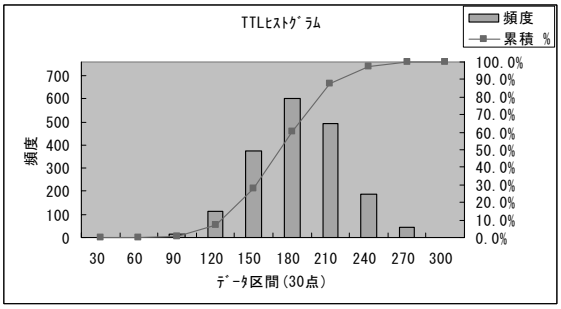
統計項目	GRM	LST	RDG	TTL（G+L+R）
標本数	1832	1832	1832	1832
平均	67.8	47.9	54.9	170.6
標準偏差（ n ）	17.236	11.388	14.818	34.424
標準偏差（n － 1）	17.24	11.391	14.822	34.434
分散（ n ）	297.064	129.685	219.569	1185.020
分散（n － 1）	297.226	129.755	219.689	1185.667
最小値	9	0	0	9
中央値	68	46	54	172
最大値	100	88	96	266
範囲	91	88	96	257
第１四分位数	55	42	46	147
第３四分位数	82	54	67	194
歪度	-0.281	0.019	-0.091	-0.037
尖度	-0.526	0.148	-0.078	-0.103
変動係数	0.254	0.238	0.270	0.202

20 年度後期各セクションとトータルのヒストグラム









資料５の解説：上記の基礎統計表とヒストグラムには様々の特徴が見て取れるが、特に大きな特徴は前期も後期もリスニング（ＬＳＴ）の分散が、文法（ＧＲＭ）や読解（ＲＤＧ）に比べて小さいという点である。素点で言えば40点台から50点台に得点が集中している。これは、受験者にとってリスニング問題に関しては共通の要素、項目で得点に結びつかないところが多かったという解釈が可能であり、今後学生の解答状況の分析を実施する必要があると考えている。

3.3　ｔ検定による学力伸長の検証

3.2で示した20年度前期・後期のG-TELP結果の推移についてt検定による検証結果を以下に報告する。

資料６　平成20年度　前期・後期G-TELPテスト比較データ

●検定方法：ｔ－検定（一対の標本による平均の検定ツール）
●実施テスト：G-TELP　前期７月実施（Form313）　後期12月実施（Form315）

●対象者：2008年度のG-TELPを前期（７月）、後期（８月）ともに受験した全受験生
●帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
●判断基準
P（T＜=t）　両側＜有意水準（０.05）　⇒　棄却　⇒「有意差が無い」とはいえない　⇒　有意差が有る
P（T＜=t）　両側＞有意水準（０.05）　⇒　採択　⇒　有意差が無い
※両側検定にて判断

■合計点

	前期（合計点）	後期（合計点）	平均点差
平均	157.4	170.7	13.3
分散	1006.307	1170.190	
観測数	1791	1791	
ピアソン相関	0.700704698		
仮説平均との差異	0		
自由度	1790		
t	-21.9596438		
P（T<=t）片側	3.88583E-95		
t 境界値 片側	1.645705339		
P（T<=t）両側	7.77166E-95		
t 境界値 両側	1.961290108		

検定結果
P（T＜=t）両側＜0.05⇒よって、仮説は棄却
平均点の差（＋13.3）は有意差が有るといえる

■Grammar（文法）

	Grammar	Grammar	平均点差
平均	60.3495254	67.88330542	7.5
分散	271.4654732	292.171291	
観測数	1791	1791	
ピアソン相関	0.543753664		
仮説平均との差異	0		
自由度	1790		
t	-19.87406746		
P（T<=t）片側	6.96635E-80		
t 境界値 片側	1.645705339		
P（T<=t）両側	1.39327E-79		
t 境界値 両側	1.961290108		

検定結果
P（T＜=t）両側＜0.05⇒よって、仮説は棄却
平均点の差（＋7.5）は有意差が有るといえる

■Listening（聴解）

	Listening	Listening	平均点差
平均	41.0106086	47.89558906	6.9
分散	106.0384349	128.9248465	
観測数	1791	1791	
ピアソン相関	0.301860225		
仮説平均との差異	0		
自由度	1790		
t	-22.72653984		
P（T<=t）片側	5.7463E-101		
t 境界値 片側	1.645705339		
P（T<=t）両側	1.1493E-100		
t 境界値 両側	1.961290108		

検定結果
P（T＜=t）両側＜0.05⇒よって、仮説は棄却
平均点の差（＋6.9）は有意差が有るといえる

■Reading（読解）

	Reading	Reading	平均点差
平均	56.04466778	54.91345617	-1.1
分散	221.6538696	219.0813328	
観測数	1791	1791	
ピアソン相関	0.594582732		
仮説平均との差異	0		
自由度	1790		
t	3.581345593		
P（T<=t）片側	0.000175478		
t 境界値 片側	1.645705339		
P（T<=t）両側	0.000350957		
t 境界値 両側	1.961290108		

検定結果
P（T＜=t）両側＜0.05⇒よって、仮説は棄却
平均点の差（－1.1）は有意差が有るといえる

資料６の解説：　2008年度のG-TELPの前期試験と後期試験の平均点の差をｔ－検定を用いて検証した。結果としては、ＴＴＬ（+13.３）、ＧＲＭ（＋７.５）、LST（＋６.９）、RDG（－１.１）というそれぞれの項目の前期試験から後期試験に掛けての平均点の差（推移）にはすべて「有意差がある」との結果となった。「有意差」とは、「偶然に起こる可能性が極めて少ない差」、「意味のある差」であり、今回でいえば、「受験者の英語能力に、意味のある明確な差」があったということである。

上記を踏まえると今回のG-TELP結果からＧＲＭ、ＬＳＴでは受験者の英語能力が向上し、逆にＲＤＧでは英語能力が若干低下。総合的（TTL）には、受験者の英語能力は向上したと統計的に云うことができる。

４．新たな成績評価システム－個別定期試験とG-TELPによる混合評価

20年度英語教育改革の大きな眼目のひとつが、あらたな成績評価システムの構築であった。英語コア科目、インテンシブ英語、英語特別演習については今年度より、個別的試験80％、G-TELP 20％で期末評価を出すことにした。このねらいは以下の３点に要約できる：

Ａ）授業環境・効率の改善と教育成果が客観的に確認できるシステムの構築を目指す。

Ｂ）実力テスト（G-TELP）を期末評価の一部として導入することで教員による評価のバラつき（いわゆる厳しい評価・甘い評価の別）をある程度是正して平準性の高い評価システムを構築する。

Ｃ）期末試験対策は当該授業のテキストの学習の

みで十分と考える慣習的・旧来的学習観を教員・学生ともに改め、学生に普段の自主学習による実力養成の重要性を認識させる。

この新たな混合評価については20年９月に早稲田大学で行われたJACET（大学英語教育学会）第47回全国大会で発表した「鹿児島大学における英語成績評価の新たな試み　－個別定期試験とG-TELPによる混合評価－」の中の資料を活用しながら、上記Ａ)、Ｂ)、Ｃ）の項目について報告する。

Ａ）について　－　客観評価への第一歩

⑴　20年度は暫定的にG-TELP20％評価

「教育成果の客観的確認」というのがここでのテーマであるが、今回G-TELPを成績評価に一部導入したことにより、全学規模での共通実力テストによる客観的評価が可能になったということができる。この場合のG-TELPの割合がなぜ20％なのかという点については、19年度の改革審議中にも種々の議論が出たところでもあり、また９月のJACETでの学会発表時にも参加者から質問がでたところでもあるが、本学では種々の議論を踏まえとりあえず、20年度は20％で試行する、というところに落ち着いた経緯がある。従って、現在のところこのG-TELP20％という割合に成績評価の観点からの何がしかの根拠がある、ということではない。今後の状況を見た上でさらに検討を加える必要が出てくる可能性もある。（定期試験と外部試験の混合評価の先行事例としては、例えば北海道大学ではTOEFL iBT 50％を成績評価に導入、また、大阪大学では同じくTOEFL iBT30％を成績評価に導入などの例がある。）

⑵　定期試験との関連性のために「当該領域対応」を実施

また、G-TELP導入に当たっては、個別定期試験の科目内容（作文や読解）とG-TELPの試験セクション（文法、リスニング、読解）が相応に合致するように配慮した「当該領域対応」を実施した。これは、昨年の改革審議の中で「自分が担当する英文読解のクラスになぜ総合試験であるG-TELPの評価を入れるのか。「自分は読解は教えているがリスニングは教えていない」などの声があり、この問題に対処するための方略として、前述の「当該領域対応」を考えたわけである。以下の表参照。

資料７　当該領域対応一覧表

（G-TELP20%評価の内訳）

G-TELPは３部門それぞれ100点で計300点（素点）の試験		G-TELPの３つのセクション		
		Grammar	Listening	Reading& Vocabulary
科目名	コアC	●		
	コアU	●	●	●
	コアO		●	
	コアR			●
	インテンシブ英語I	●	●	
	インテンシブ英語II	●		●
	英語特別演習	●		●

資料７の解説：この表によれば、例えばコアＲ（読解）の場合、授業内容と最も関連性の高いReading & Vocabularyを対応させ、そのセクションの得点を20％に圧縮して評価としている。またコアＵ(総合)の場合は授業内容と３つのセクションすべてに関連性があると考え、３つのセクションすべての得点を20％に圧縮して評価するやり方である。

Ｂ）について－評価の平準性を求めて

⑴　習熟度別クラス編成に伴う‘単位の質’の問題

GPA制度導入以来、とくに厳しく求められるようになったのは「評価の平準性・厳格性」という概念である。このことは平成20年３月に国立大学協会から出された「国立大学の目指すべき方向　－自主行動の指針－」の中にもはっきりと打ち出されている方向性である。このような国策的ガイドラインが意味するところは、教員による評価にいわゆる甘い・厳しいのバラツキがある、という従来型の個別定期試験制度で必ずきかれる声に何らかの形で対処することが、国立大学の今後のあり方として望ましいということである。さらに、習熟度別クラス編成にした際、多くの大学で聞かれるのは（20年９月のJACET全国大会の発表時にも質問者から同様の声有り）いわゆる‘単位の質’の問題である。これは端的に言えば、上級クラスの‘優’と下位クラスの‘優’は同質とはい

えないのではないかという、これも裏を返せば、習熟度別クラス編成下での個別定期試験制度に対する疑問もしくは批判と考えられる。

⑵　評価変動パターンについて

上記⑴で述べた単位の質、評価の平準性の問題に関して、以下にG-TELP20％導入によって考えられる評価変動パターンを以下に示して解説する。

資料８　G-TELP20%導入によって考えられる評価変動パターン

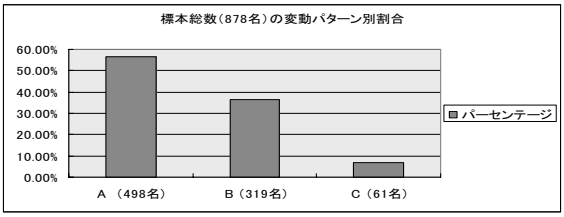
パターン	学生	（定期試験）	（G-TELP）	期末評価	評価の変動
A	吉田太郎	59/80 （＝74/100） （良）	14/20 （＝70/100）	73/100 （良）	ゼロ変動
B	佐藤花子	72/80 （＝90/100） （秀）	9/20 （＝45/100）	81/100 （優）	ダウン変動
C	鈴木一郎	54/80 （＝68/100） （可）	18/20 （＝90/100）	72/100 （良）	アップ変動

資料８の解説：これはG-TELP20%の英語成績評価への導入が評価にどのような影響を及ぼすかについて３つの考えられるパターンを示したもの。パターンＡは教員による個別定期試験結果が80点満点の59点であり、これは100点満点では74点で、秀（100 ～ 90)、優（89 ～ 80)、良（79 ～ 70)、可（69 ～ 60)、不可（59 ～）のGPA制度下では「良」にあたる。このパターンではG-TELP 20点満点で14点、これは100点満点では70点に相当し、トータルでは73点となり「良」の評価である。つまりパターンＡでは、旧来型の定期試験のみの評価とG-TELP結果を加えた総合評価に変動がないのでこれを「ゼロ変動」と呼ぶことにする。パターンＢは教員による個別定期試験結果が80点満点の72点であり、これは100点満点では90点で、秀（100 ～ 90)、優（89 ～ 80)、良（79 ～ 70)、可（69 ～ 60)、不可（59 ～）のGPA制度下では「秀」にあたる。ところがこのパターンではG-TELPは20点満点で９点、これは100点満点では45点に相当し、トータルでは81点となり「優」の評価である。つまりパターンＢでは、旧来型の定期試験のみの評価とG-TELP結果を加えた総合評価との間に下降変動がみられるのでこれを「ダウン変動」と呼ぶことにする。最後に、パターンＣは教員による個別定期試験結果が80点満点の54点であり、これは100点満点では68点で、秀（100 ～ 90)、優（89 ～ 80)、良（79 ～ 70)、可（69 ～ 60)、不可（59 ～）のGPA制度下では「可」にあたる。ところがこのパターンではG-TELPは20点満点で18点で、100点満点では90点に相当し、トータルでは72点となり「良」の評価である。つまりパターンＣでは、旧来型の定期試験のみの評価とG-TELP結果を加えた総合評価との間に上昇変動がみられるのでこれを「アップ変動」と呼ぶことにする。

⑶　G-TELPの導入による評価の平準化の実態

以下に、グラフを使ってG-TELP20％評価が英語の期末評価にもたらした影響について述べたい。まず、20年度前期の結果は以下の通り（標本数は878名。これは母集団2007名の約44％にあたる。標本は全８学部のうち７学部にまたがる）：

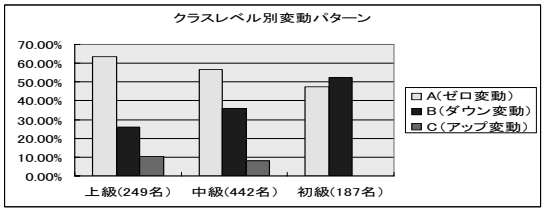
資料９－a　20年度前期　標本総数（878名）の変動パターン別割合



変動パターン	A （ゼロ変動）	B （ダウン変動）	C （アップ変動）
パーセンテージ	56.70%	36.30%	6.90%

資料９－aの解説：G-TELP20％導入によっても評価に変動のないゼロ変動パターンが最も多く全体の56.7％、ダウン変動が36.3％、アップ変動が最も少なく6.9％であるが、これをクラスのレベル別に見ると以下のようなグラフになる：

資料９－b　20年度前期　クラスレベル別変動パターン

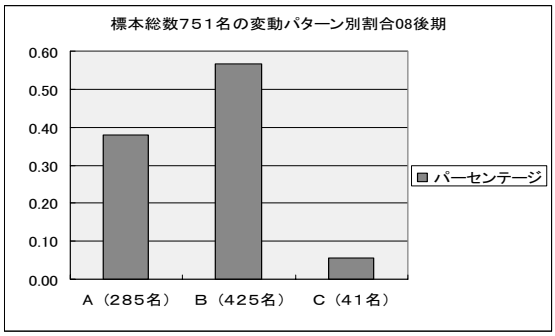


	上級（249名）	中級（442名）	初級（187名）
A（ゼロ変動）	63.50%	56.80%	47.60%
B（ダウン変動）	26.10%	35.80%	52.40%
C（アップ変動）	10.40%	7.90%	0%

資料９－bの解説：このグラフで注目すべきは、ダウン変動が上級、中級、初級と割合が上昇しているという点である。初級にいたってはゼロ変動よりもダウン変動の割合が高くなっている。これは、初級の場合、個別定期試験の結果が良くても、G-TELPの結果によって全体が押し下げられている傾向があるということを表している。言い換えれば、下のレベルの学生が簡単に秀や優レベルを取れていないということを意味し、評価の平準の方向性が出ていると推測することができる。アップ変動は上級と中級に見られるが、典型的には、個別定期試験の結果が悪くても、実力試験であるG-TELPである程度カバーしているパターンが見て取れる。

この変動パターンが20年度後期はどうであったかについて以下のグラフを見ることにする。
（標本数は751名。これは母集団1832名の約41％にあたる。標本は全８学部のうち７学部にまたがる）

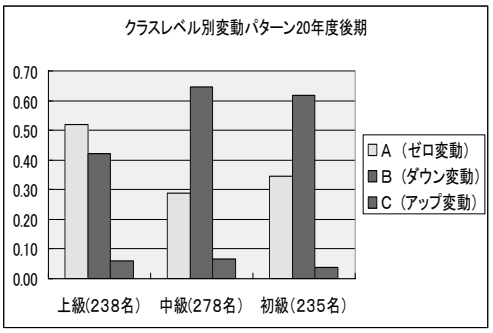
資料10－a　20年度後期　標本総数（751名）の変動パターン別割合



変動パターン	A（ゼロ変動）	B（ダウン変動）	C（アップ変動）
パーセンテージ	37.9%	56.6%	5.50%

資料10－a解説：このグラフで注目すべきはゼロ変動よりもダウン変動の割合が高くなっている点である。ゼロ変動の割合とダウン変動の割合が前期と逆になっているということができる。これをクラスのレベル別に見ると以下のようなグラフになる：

資料10－b　20年度後期　クラスレベル別変動パターン



	上級（238名）	中級（278名）	初級（235名）
A（ゼロ変動）	52.10%	28.80%	34.50%
B（ダウン変動）	42%	64.70%	61.70%
C（アップ変動）	5.90%	6.50%	3.80%

資料10－bの解説：このグラフでは、中級と初級でダウン変動がともに60％を超えていて、G-TELP20％の評価導入が、成績評価に少なからぬ影響を及ぼしていることがわかる。前期のパターンと異なり、なぜダウン変動の割合が高くなったかの原因としては以下の３つが考えられる：１）科目が前期と後期では異なる；２）G-TELP20％評価の当該領域が前期と異なる；３）担当教員が代わった。このうち１）と２）については以下の表がある程度の裏付けになると考えられる：

資料10－c　20年度前期・後期開講科目毎の平均点その他

時　期	前期	前期	後期	後期
クラス	コアC	コアU	コアR	コアO
採用セクション	GRM	TTL	RDG	LST
平均	12.2	10.6	11.0	9.5
標準誤差	0.1	0.0	0.1	0.1
中央値(メジアン)	11.8	10.6	10.8	9.2
最頻値（モード)	11.8	11.2	11.6	9.2
標準偏差	3.3	2.1	3.0	2.2
分散	11.0	4.6	8.8	4.9
尖度	-0.5	-0.1	-0.1	0.2
歪度	-0.1	0.1	-0.1	0.0
範囲	18.2	13.7	18.4	17.6
最小	1.8	4.1	0.0	0.0
最大	20.0	17.7	18.4	17.6
合計	23285.2	20295.0	19696.8	14973.0
標本数	1913.0	1913.0	1790.0	1576.0

資料10－cの解説：　まず､前期はコアＣ（作文）とコアＵ（総合）であり、G-TELPの当該領域はコアＣが文法であり、コアＵが文法、聴解、読解･語彙である。前期２科目のG-TELP20％換算平均点は22.8である。 それに対して後期はコアＲ(読解）とコアＯ（オーラル）であり、G-TELPの当該領域はコアＲが読解であり、コアＯが聴解である。後期２科目のG-TELP20％換算平均点は20.5であり、これは前期より2.3ポイント低い。素点だけの比較評価では概略的な評価にとどまるであろうが、G-TELPの３つのセクションの中では聴解が最も低く、後期はコアＯが聴解で20％評価となるなど、不得意な分野での評価の比重が、前期よりも高くなったということがいえる。このことが総合評価に少なからぬ影響を与え、それが後期のダウン変動割合のアップにつながったと見ることは可能であろう。

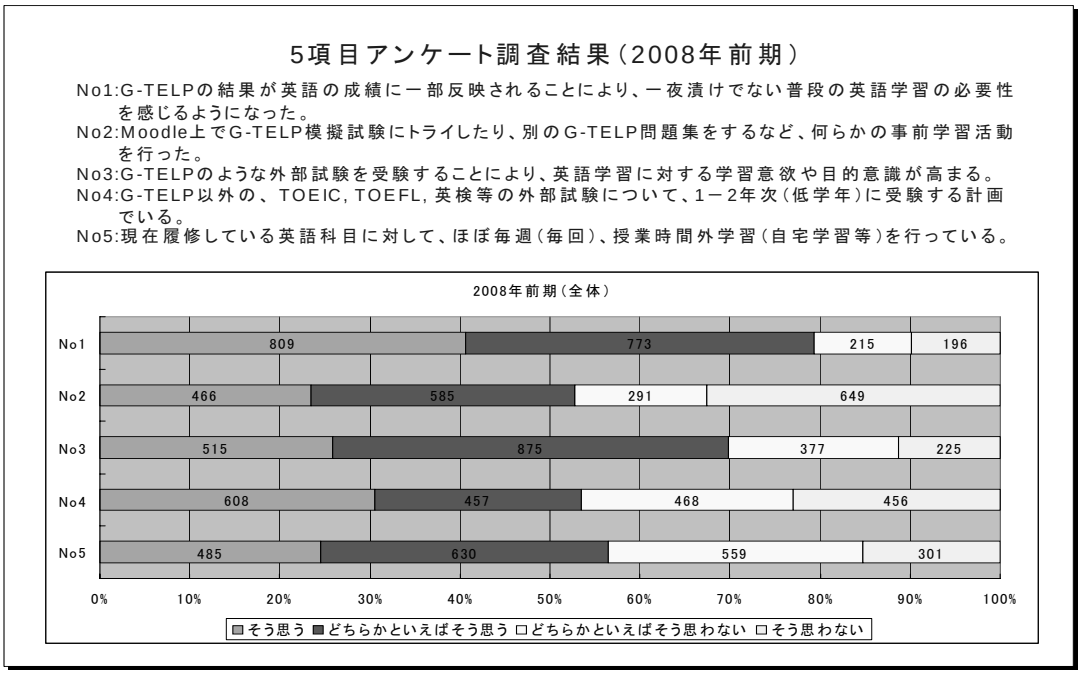
結論として、20年度前期・後期の変動パターンからみると、G-TELP20％導入は下位クラスの場合ほど、平準化のために資するところがあったということがいえる。つまり、例を挙げて言えば、定期試験では80点台の得点で、もし定期試験のみであれば‘優’の評価にあたるものが、実力試験であるG-TELPの結果をさしはさんだ結果、最終期末評価が‘良’に終わる、というようなケースが、下位クラスの場合ほど多く見られるという結果となっている。

Ｃ）について－英語学習に対する学生の意識改革の第一歩

⑴　単なる一夜漬けでない普段の自主学習の必要性を認識

20年度のG-TELP実施に当たっては、G-TELPを英語成績評価に導入したことを学生がどう受け止めているかを知る目的で５項目からなるアンケートを実施した。以下のグラフ11－aは前期の結果である：

資料 11 － a　学生へのアンケート結果―20 年度前期

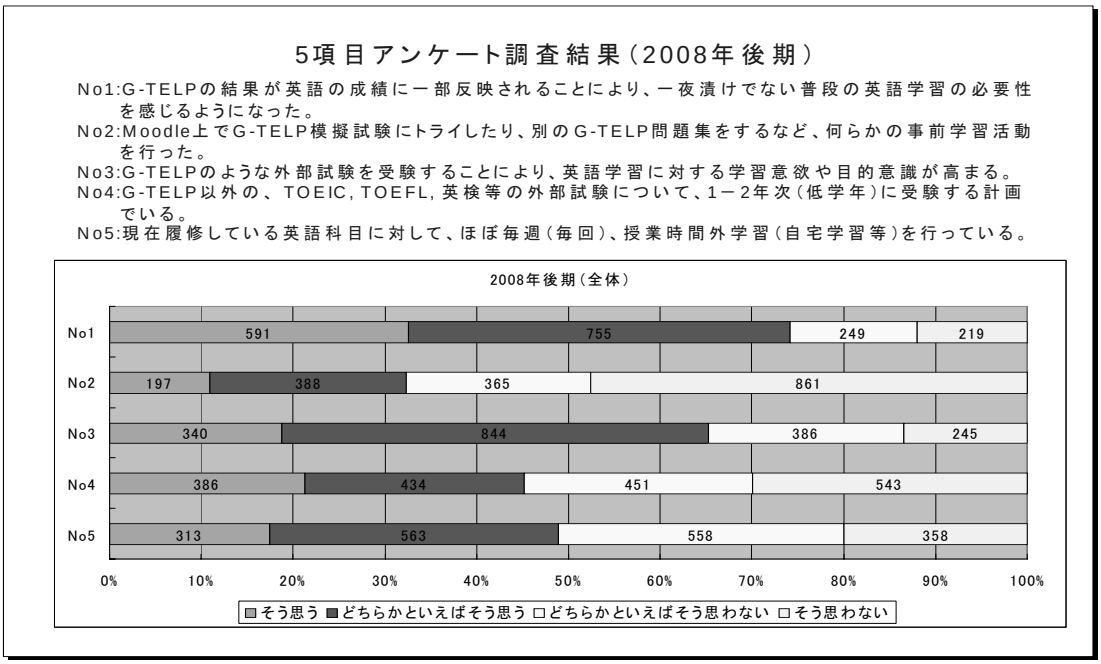


資料11－aの解説：このグラフで注目すべきはアンケート項目１の「G-TELPの結果が英語の成績に一部反映されることにより、一夜漬けでない普段の英語学習の必要性を感じるようになったか」という質問に対して全学の約80％の学生が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」というポジティブな回答をしている点である。これは、定期試験の勉強は当該テキストだけ学習しておればよい、とする旧来的で狭小な学習観から学生を脱却させて、真の実力をつけるための普段の自主学習の重要性を認識させる方向への第一歩となるのではないかと期待できる結果といえる。

さらにアンケート項目の３の「G-TELPのような外部試験を受験することにより、英語学習に対する学習意欲や目的意識が高まるか」との質問に対して、全学の約70％の学生が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」というポジティブな回答をしている点も注目すべきであろう。これはいわゆる学習動機の問題で、このあたりを適正に今後進めていくことにより、良好な学習動機を学生に付与することが可能になると思われる。

この前期の分と後期のアンケート結果を比較してみる。以下の後期アンケート結果を示すグラフを見てみる。

資料 11 － b　学生へのアンケート結果―20 年度後期



資料 11 － b の解説：前期に比べると各質問項目で「そう思う」というポジテイブな回答が減って「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」などのネガテイブな回答が増えている。このことは以下の前期・後期対象表でよりはっきりとわかる：

資料11－c　学生アンケートの前期と後期の比較表

■アンケート項目
No １：G-TELPの結果が英語の成績に一部反映されることにより、一夜漬けでない普段の英語学習の必要性を感じるようになった。
No ２：Moddle上でG-TELP模擬試験にトライしたり、別のG-TELP問題集をするなど、何らかの事前学習活動を行った。
No ３：G-TELPのような外部試験を受験することにより、英語学習に対する学習意欲や目的意識が高まる。
No ４：G-TELP以外の、TOEIC、TOEFL、英検等の外部試験について、１－２年次（低学年）に受験する計画でいる。
No ５：現在履修している英語科目に対して、ほぼ毎週（毎回）、授業時間外学習（自宅学習等）を行っている。

		No1		No2		No3		No4		No5	
そう思う	前期	40.6%		23.40%		25.9%		30.6%		24.6%	
	後期	32.6%	-8.0%	10.90%	-12.5%	18.7%	-7.1%	21.3%	-9.3%	17.5%	-7.1%
どちらかといえばそう思う	前期	38.8%		29.40%		43.9%		23.0%		31.9%	
	後期	41.6%	2.8%	21.40%	-8.0%	46.5%	2.6%	23.9%	0.9%	31.4%	-0.5%
どちらかといえばそう思わない	前期	10.8%		14.60%		18.9%		23.5%		28.3%	
	後期	13.7%	2.9%	20.20%	5.5%	21.3%	2.3%	24.9%	1.3%	31.1%	2.8%
そう思わない	前期	9.8%		32.60%		11.3%		22.9%		15.2%	
	後期	12.1%	2.2%	47.50%	14.9%	13.5%	2.2%	29.9%	7.0%	20.0%	4.7%

資料11－cの解説：この表に見られる前期から後期にかけての回答の変化についてはその考えられる要因について今後検討する必要がある。

その他の改編項目について

20年度英語教育改革には上記４つの改編項目の他に以下のような項目がある：

５．大学院生向けインテンシブ英語アカデミッククラスの開講
６．英語基礎クラス「英語特別演習」の開講
７．英語オープンでe－learningクラス開講
８．英語オープンで初級・中級・上級英会話クラス開講
９．英語コアクラスで推奨テキストを使用

以下にそれぞれ状況を述べる。

５．大学院生向けインテンシブ英語アカデミッククラスの開講

教育センターの英語教育に関する理念のひとつが「基本レベルの英語から大学院レベルの英語まで」ということであり、この５の項目は後で述べる６と相俟って、20年度の教育センターの取り組みの中で重要なもののひとつである。このクラス群はある特定の学部研究科に籍を置く形で開講するのではなく、教育センターが広く全学向けに開講すると言う点でこれまでにない新機軸であるといえる。前期、後期それぞれ３つのクラス（アカデミックライテイング＆プレゼンテーション、アカデミックライテイング、アカデミックリーデイング）を水曜日５時限に配置する形となっている。これらのクラスの果たす意義は小さくはないと考えられるが、今後に向けた課題もある。そのひとつはこの新たなスキームに必ずしも全学が参加していないという現状である。また、参加はしても単位認定のあり方がまちまちで、学部によっては単位認定しないところもあり、せっかくの新たなスキームが周知徹底していないうらみがある。また、これらのクラスのうちひとつを担当していた教員が年度中途で退職したため、当該クラスの後期開講ができなくなるなどの自体も発生しており、状況がなお不安定である。今後これらの課題をどうするか、早急に何らかの方向を打ち出す必要がある。

６．英語基礎クラス「英語特別演習」の開講

上記５と関連して、上のレベルの学生だけでなく、基礎力の不足している学生向けの授業の充実を目的として20年度から前期・後期開講した。このクラスはセンター試験等である一定レベル以下の学生を受講対象者としている点が特徴である。こうすることによって、ハイレベルの学生が安易に単位取得を目的としてこのクラスを受講することを未然に防いでいる。

このクラスは週２回授業で２単位認定し、それをコア科目と読替えるという教務上の措置をとっている（何単位までをコア英語と読み替えるかについては学部毎に異なる）。受講生は前期20名以下という少数ではあったが、今後周知徹底すれば定着していくものと思われる。

７．英語オープンでe－learningクラス開講

これも20年度英語改編の新機軸クラスである。２年生前期の英語オープンで今年新たにe－learningクラスを開講し、今後の新たな授業形態のひとつとして期待されるものである。ねらいは、教室での固定した教員―学生のやり取りという図式から学生をある程度開放し、教室以外のところでの学習を可能にするというところである。今年度の受講者数は10数名程度と少人数ではあったが、様々な可能性を秘めた新機軸クラスであるので今後の定着を図る必要があると考える。ただ、担当していた教員が年度中途で退職したため、21年度の予定が今のところ立っていないというような来年度に向けて解決すべき課題もある。

８．英語オープンで初級・中級・上級英会話クラス開講

２年生前期の英語オープンで習熟度別編成のネイテイブ教員による英会話クラスを設置する目的で、今年度初級、中級、上級会話クラスが開講された。授業開始時にプレイスメントテストを実施してクラス分けを行い、受講生は初級、中級、上級それぞれ20名以内の少人数クラスで好評のうちに今年度の授業は終了した。

９．英語コアクラスで推奨テキストを使用

20年度はコア英語クラスで習熟度別編成を実施するにあたり、レベルに適合した教材選びが必須の要件として浮上してきた。従来のように、使用テキストの選択を教員の完全自由裁量とすることは、習熟度別クラス編成の意義を大幅に減じる可能性が少なからずあるため、今年度は推奨テキスト制度を採り、教育センターの英語作業部会で選定した複数のテキストの中から任意に教員が選択するという体制とした。どうしても推奨テキスト以外のテキストを使用したい場合には、理由を添えて教育センターに申請し、了解のもとで推奨外テキストの使用を可能にするという制度上の幅も持たせている。結果的には専任・非常勤を問わずほとんどの教員（96％程度）が推奨テキストの中から適宜選択して使用したというのが前期の状況である。習熟度別クラス編成を続ける以上、この推奨テキスト制度の維持は不可欠であると考える。ただ、実施運営面においてなお改善の余地があれば、教員諸氏の意見等を待って改善していきたい考えである。

その他：後期に向けて学生のクラス入れ替え（若干数）を実施

20年７月のG-TELP、個別定期試験実施を経て期末成績が出揃った段階で、各教員に対して後期のクラス編成に向けて若干数の学生の入れ替え申告をお願いした。入れ替えの申告の際、何を根拠とするかについては、７月28日の英語作業部会で審議の結果、特にどの成績を根拠とするということではなく、各教員が前期授業を担当した結果としての総合判断的な裁量にゆだねる、という方針をとることとなった。当初、申告の状況によっては後期のクラスサイズに偏りが出るのではないかとの危惧もあったが、実態としてはそのようなことはなく、各教員からの申告分はそのまま後期のクラス編成に反映されている。入れ替えの総数は107名（上位クラスへの移動：63名、下位クラスへの移動：44名）であった。

20年度の総括－英語教育改革の一歩前進

英語教育改革の初年度を終えて、総体的には順調な滑り出しということができる。最大の懸案は７月と12月のG-TELPの全学実施が滞りなく実施できるかという点であったが、英語教員各位並びに事務職員の協力を得て問題なく実施できたことは特筆に価する。また個別定期試験とG-TELPの混合評価も、教員各位の協力により、問題なく実施できたことも少なからぬ意義がある。もうひとつの懸案であったG-TELPの受益者負担受験料（年２回で合計￥1500）も鹿児島大学生協から多大の支援･協力を得て、99％以上の徴収率に達し、ほぼ完納といえる状況である点も意義は大きい。

教育の質の保証という観点から、目に見える客観性の高い評価システムの構築を目指して、共通実力テスト（G-TELP）を導入したわけであるが、

英語期末評価に組み込むことによって全学規模でG-TELP受験を制度化したことの意義は決して小さくはないと考えられる。また、学力評価の観点から、G-TELPの年２回実施によって、１年間にわたる客観的なレベルでの学力推移が検証できるようになったということも今回の英語教育改革の成果として挙げることができる。

その学力推移の検証によって、前期から後期にかけて統計的に有意差のある学力の伸びが見られたことは、少なくとも、種々の改革を進めつつある共通教育としての英語教育が、決して形だけの形骸化したものではなく、教員、学生ともに前向きに努力している実質的結果であると考えることが可能であろう。

21年度に向けて

21年度は、20年度前期・後期の改革実績を踏まえて、学生の学力推移の客観的検証を実施し、学生の弱点診断等の英語教育的視点からの知見を蓄積していく予定である。そのデータ蓄積を基にして、本学の英語カリキュラムの改善や、英語力養成のためのテキスト開発等につないでいきたい考えである。

また、20年度に開始した様々な新制度については教員・学生からの意見等を聞き、今後のさらなる改善に結びつける努力も当然必要とされるものである。